

柱2		子どもの学びへの能動的な貢献(子どもの読書活動推進)		現状・進捗状況	課題・今後
1	【学校図書館の機能強化】 学校教育課、教育総務課、小・中学校、学校司書等と連携し、市立図書館と学校図書館との蔵書の効果的な活用に向けた取り組みを進めます。	☐ 学校図書館蔵書のデータベース化 ☐ 学校図書館への図書館システム導入(蔵書管理、貸出返却作業等の電算化) ☐ 学校間、学校と市立図書館間の運搬システム導入 ☐ 学校司書配置のあり方を検討	学校図書館が電算化されて、児童・生徒と教員が市内の全学校図書館と市立図書館の蔵書を横断的に検索し、読書や学習活動に活用している。学校司書による授業参画が充実している。	・勤務時間内に市立図書館へ貸出・返却に行けるようになってよかった。搬送便が始まってさらに便利になった ・蔵書管理システムの導入により、児童生徒が読みたい本を市立図書館から取り寄せることができるようになった。横断検索による資料の有効活用 ・利用統計をすぐ出せるようになった ・DB化作業のための廃棄とシステム導入により蔵書の把握ができるようになったことで、不要図書の廃棄が日常的に行えるようになった ・PC作業に興味を持ち図書委員になりたい児童が増えた。楽しく借りることができるようになり学校図書館へ来るきっかけになっている ・「図書だより」に多読者ランキングのせると、子どものモチベーションになるようだ ・システム導入により全館の蔵書検索が可能になり、選書の際の参考にできる。図書の登録作業が容易になり、新刊を早く出せるようになった ・図書館業務全般で作業の効率化が進み、子どもとのコミュニケーションに充てる時間が増えた ・DB化のために除籍方法やラベルの統一ができたのはよかった。教員にも知ってもらえた	・兼務校が減らないことや勤務日数の偏りにより、学校によって図書館サービスに格差ができている。基本業務や環境整備を十分に行えない学校があった ・タブレットを学校司書にも支給してもらい、子どもがどう使っているかを知って学校図書館の活用につなげられると思う ・子どもが読みたい本を自分で探せるように、学校図書館システムの児童用OPACで他校の蔵書検索ができるとよい ・勤務日数が少ない学校では利用状況が見えてこない ・学校図書館のインターネット接続が不安定。子どもが学校図書館でタブレットを使用するとカウンターPCがネットにつながらなくなることが多い。八束小、蒜山中、川上小 ・学校によって図書購入予算が違い、少ない学校では思うように購入できない。限られた予算でいい本を選書する力が求められるなど感じている ・市内図書館から取り寄せることができるということの周知が足りていない
2	【学校図書館との連携】 学校図書館が児童生徒や教員にとっての、読書活動の拠点としての「読書センター」、授業に役立つ資料を備え学習支援を行う「学習センター」、情報活用能力を育む「情報センター」であることを教員だけでなく、保護者や市民等に周知します。	☐ 学校図書館を活用した調べ学習、読書活動の支援 ☐ 学校司書の研修実施 ☐ 学校図書館活用をテーマにした講座等の開催	学校図書館法に定められている、学校図書館の目的を、子どもに関わる人たちが共有し、学校図書館が活発に利用されている。	・他校のオリエンテーションや図書委員活動などを見学した。ほかの学校でもこうした取り組みをするといいと思う ・小学校は全学年でオリエンテーションを実施できた。中学校は1年生のみで実施。徐々に利用のルールが浸透してきた ・中学校は図書室に來ない生徒もいるので、新着図書をまとめて月に一回図書便りに載せている ・蒜山図書館と蒜山の3つの学校との連携イベントが好評だった。 ・教科書に載っている図書や学校に所蔵のない図書を公共から借用、学校図書館の図書も一緒に教室に置いている ・百科事典を所蔵していない学校に、中央図書館の学校支援用のものを長期貸出している	・読書傾向のつかめない学校があり、選書が難しかった。購入リクエストを受け付けていたが、児童生徒に周知できていなかった。 ・イベントだけに頼らない日常的な読書のためにできる手立てを考えていきたい。子どもが自ら「読みたい」「利用したい」と思うことが理想。何もしなければ「読書の定着」はどの学校でも難しいと感じる。 ・授業の進み具合と学校司書の勤務日がずれていることが多く、教員からの依頼が少ない原因になっている。若い先生のほうが気軽に声をかけてくれる
3	【子どもの学びを支援】 学校と連携して子どもが読む力、調べる力、多様なメディアを使いこなす力をつける支援をします。	☐ 調べ学習の支援 ☐ 子ども対象のICTメディアリテラシーやプログラミングの講座等を実施	子どもが生涯にわたって読み、調べ、多様なメディアを使いこなす力を身につけている。	・システム導入により本が探しやすくなった。自校の蔵書の利用がスムーズになった ・プログラミングやメディアリテラシーに関する蔵書を整備した ・地域学習のための図書を常設展示して、調べ学習の授業で資料をすぐに利用できる環境を整えた ・学校図書館で司書が授業をすることはほとんどないが、図鑑の使い方は司書が指導した。学校図書館で校長が新聞の使い方の授業をされた	・教員からNIE教育の実践など、多様なメディアに触れる機会を設けてほしいと要望があったが実現できなかった。 ・多様な媒体を提供し、学習する機会を設けることで、必要な情報を取捨選択できる子どもの育成に関わりたい。そのためには司書とともに教職員全体で取り組む必要があると思う ・授業で利用する本を公共以外に他の学校図書館からも借用できるとよい。 ・授業利用について、中学校では教員から声がかかることはほぼない。小学校も週一回の勤務で教員も手一杯で声がかからない
4	【教員支援・授業支援】 教員が主体的・対話的で深い学びの視点から授業を行えるよう、支援します。	☐ 教員向け資料の収集等の検討	教員が学校司書と連携して授業づくりを行っている。	・教員向けの図書希望アンケートをとり収集購入し。授業支援につなげている ・教員によって資料収集の依頼の頻度は大きく違う。市立図書館から借用することも多く、システム化と搬送便導入で負担が軽減された ・教員からの依頼に対して、市立図書館や県立図書館を活用して幅広い資料を提供することができた ・通級の教員から各児童の特性にあった本の依頼が多い。支援に関連するものは教員との情報交換も密にできている。 ・担任からの依頼でオリエンテーションや読み聞かせ、授業内容に沿った資料を準備している。依頼を受けることで選書にもつながっている ・3年生国語の単元「魚の絵を描こう」で、担任に「図書室で本を見て描いてください」と提案。学校司書が魚の本がある場所を説明し(4類や図鑑、絵本なども)、自分で選び、自分で描きたい魚を本の中から見つけて描いた。困っている児童には学校司書と一緒に本を探し、中身を見ながら描きたい魚をみつけてもらった。タブレットよりも本を見ながら描いたほうが頭に残るのでとてもいい授業だった。今後も提案して授業参画を充実させていきたい。 ・3年生のローマ字の授業でタブレットではなくローマ字の本を使って学習した ・4年生の国語の授業で、担任とコラボして紙芝居を読んだ。 ・2年生の国語の授業で、図書館の本の分類、本の並べ方について、担任と事前に打ち合わせをして学校司書が説明した。図書室で背ラベルを見せながら説明するときに、統一したラベルだと頭文字が大きいので説明しやすい。 ・通級の児童にLLブックの読み聞かせをしたところ、教員もご存じなかった。今後も紹介していく	・授業支援についてこちらから積極的に提案、実施することで、学びの深い教育に携わることができるが、教員との話し合いの時間を確保できず、完全に実現することができていない。教科書で扱う学習内容を把握できていない。 ・提供した資料を子どもたちが有効に活用でき、知識を広げることができたのか、担任から聞く機会がない。どのような調べ方をしたのか、作製したものがあったのかなども不明なことが多い。連携した授業作りではなく、「資料を渡して終わり」の支援になっている。教職員とのコミュニケーションを密にしていきたい。 ・中学校の教員が図書館の使い方を知らなかった。教員にも利用教育が必要
5	【図書館から外(地域)へ】 子どもが過ごす場所に本を届け、身近に本にふれる機会をつくります。	☐ 保育園、幼稚園、こども園、放課後児童クラブ等への自動車文庫の乗り入れや団体貸出の充実	子どもに本の豊かな世界を届けられている。	・八束小では八束こども園に学校図書館をいつでも使ってくださいと案内している ・櫻邑小では学校図書館を地域に開放している。新一年生も入学前には利用していたようだ ・長期休み中に学校で行われる地域とのイベント用に資料を集めて欲しいという依頼を受けた	

6	【子どもの居場所】 図書館を子どもが安心して過ごせる居場所の一つにしていきます。	□子どもの成長と興味にあわせた幅広いジャンルの資料を収集 □図書館の10代の人向けのコーナーへの多様な資料の充実を図る □子どもが企画段階から参画できる事業の実施 □一人でも友だちとでも自由に過ごせるスペースの整備	子どもの成長を地域で見守っている。	・学習に役立つ資料、読書を楽しめる図書など児童が興味を持つような選書をしている ・学校図書館の蔵書だけではなく連携図書を併用することで多様な資料にふれられるようになっている ・新着図書や季節、行事に合わせた図書の展示などを行っている	・勤務日数が少ない学校だと子どもの利用状況がよく分らないことも多いが、新着図書の案内を分かりやすくしたり、テーマ展示をしたり工夫している
(学校司書)学校図書館について ・ 他校の学校司書による児童生徒への取り組みの実践事例と情報の共有が必要。イベント、読み聞かせ、授業支援の内容、授業で使用した資料の共有など。 →幅広いサービスを提供することで、子どもたちの想像力や視野が広がるのではないか。学校司書にとっても自己研鑽になり、質の高い学校図書館サービスの提供ができるようになる。まずは近隣の学校で実施し、将来的には全学校で実施できるようになることを希望。他校へ出向く際の手続きも決まっているとよい。 学校司書による過去の授業支援の事例を集めて、いつでも閲覧・利用できるよになっているとよい。 ・ 各校の実態に合った図書館サービスの提供 →全校で統一すると効率化する業務がある一方、各校の実態に合わせたサービスや運営も重要。 その見極めができるように、経験を積み、研修の時間を惜しまず「最適なサービスとは何か」について常に考えて実行していく必要がある。 ・ 学校図書館の利用可能日数の確保 →児童数減少により、図書委員会の活動が廃止された学校がある。児童生徒によるカウンター業務もできなくなり、司書が勤務する一日しか学校図書館の利用ができない学校もある。教員が開館することもあるが、環境が悪くなっていると感じる。いつでも利用できることが理想。どのような解決策があるのか他校の事例を知りたい。 ・ 図書館サービスと勤務日数の格差解消 →学校司書の連携をさらに強化し、専門性を磨く努力をした上で、サービス格差の解消をめざす。(環境整備、資料提供、イベントによる読書活動推進など) 児童生徒数に関わらず、勤務日数の格差も解消してほしい。 ・ ICTの強みを活かした図書館運営 →R6年度に受講した研修で学んだ事の一つ。具体的には、イベントの告知や参加申込み、投票などをGmailやGoogleMeetで行うことで、普段図書館に興味のない人も気軽に参加できる仕組みを作ることができる。 ICTの拡張性を利用して、読書へのハードルが下がる取り組みを行いたい。そのための研修会実施を希望する。 ・ 全校で統一すべき業務を把握し、未実施をなくす(基本的な業務内容や資料のリスト作成など) ・ 小学校中学年からの読書支援(利用促進) →低学年は「図書の時間」があるため定期的に読書や貸出の機会がある。中学年以上になると、興味のない子は図書館に足を運ぶ機会が減る。 学校司書が低学年のうちに魅力ある図書の時間や読書の楽しさを提供することが重要だが、他の対策も必要。特に担任の協力が必要。 管理職だけでなく全教職員が読書の有効性や図書館の利便性を意識し、利用する機会を設けてもらいたい。 ・ 子どもの情報発信の場として活用される学校図書館 →図書館の資料で調べたことや作品を展示し、いつでも見てもらえるような場所にする。授業以外で自由に作ったものも。 誰でも平等に認められる機会をつくり、子どもの自己肯定感が高まる場所になることが理想。 ・ 年齢、学年に応じた読書ができる子ども →学校教育では「年齢に応じた読書」もよく言われるため、「段階的な読書」について考える必要がある。研修会や実践を通じて有効な手立てを考えたい。 その際に気をつけたいことは、強制するのではなくあくまで子どもが自分で読みたいと思える働きかけが重要。ただ、こういった考え方を必要とせず、自由な読書を推進する学校があれば統一すべきではないとも考えている。(個人的には、読書は自発的で自由なものと考えている) ・ 授業や学校行事と連携した資料の紹介 →子どもが「今、興味や関心のあること」をテーマにした図書展示の機会を増やしたい。学校司書がリサーチすることが難しい部分もあるため、教員から提案や希望があることが理想					